

第1回



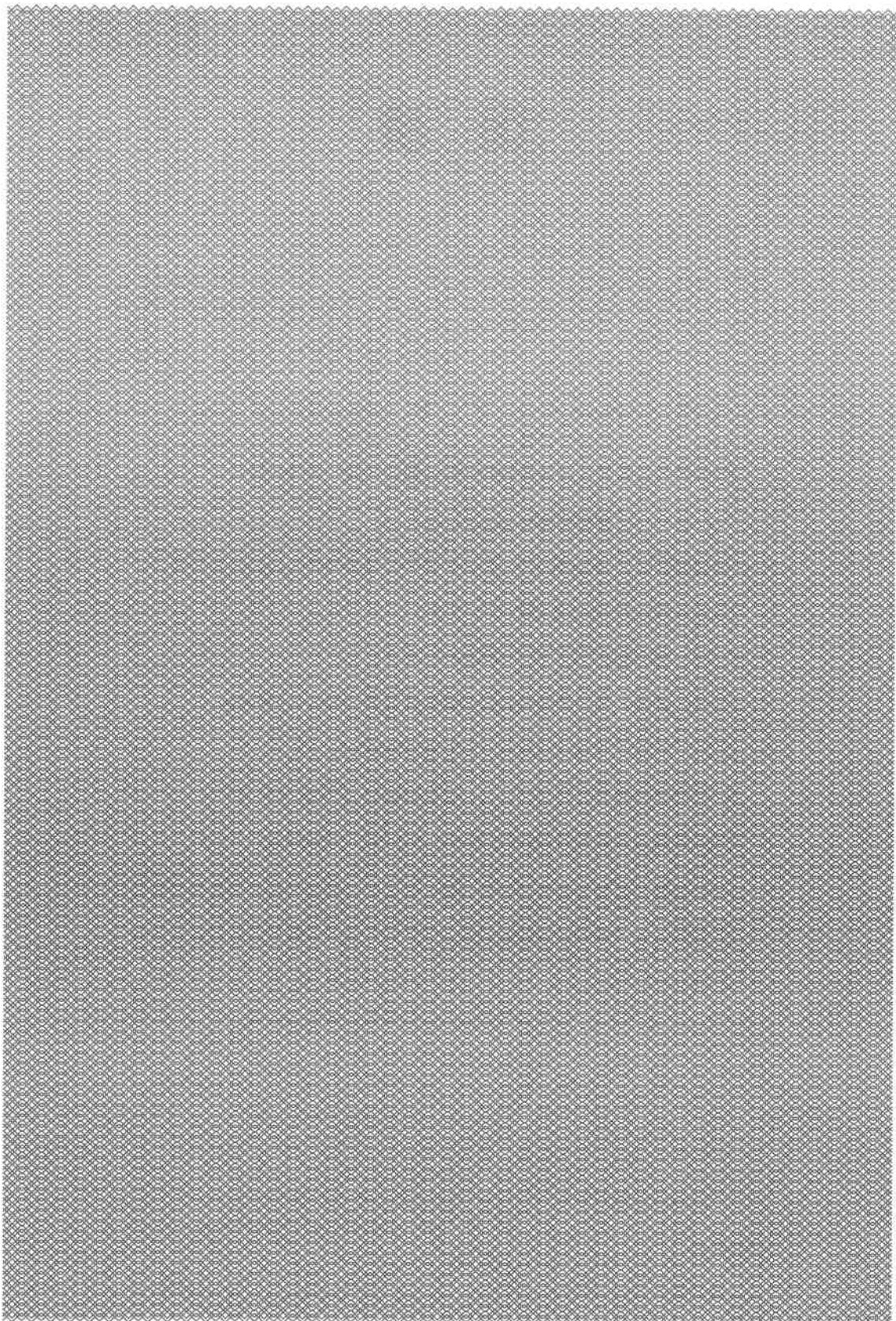
令和7年度

国語

注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があるときは、静かに手をあげなさい。
7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。
問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあと
は余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きな
さい。

受験番号				ふりがな	
				氏名	



次の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 先々のことを考えて行動を自重する。
- 2 純文学の復権を願う。
- 3 誕生日用の花束を奮発して買う。
- 4 他に比肩する者のない達人。
- 5 人に頼るのを潔しとしない。

次の——線部のカタカナを漢字で答えなさい。

- 1 キンセイのとれたデザイン。
- 2 お客様の意見にゼンショして対応する。
- 3 昔ながらのものをサツシンする。
- 4 眼下のテンボウがすばらしい。
- 5 夏のムし暑い一日を過ごす。

次の――線部の中で使われていない漢字をア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい

- 1 a. 補習のタイショウとなる b. 大会でタイショウに輝く c. 砂漠をタイショウが行く
d. 団体戦でタイショウ戦までもつれた

ア 賞 イ 称 ウ 将 エ 商 オ 象

- 2 a. 電子キキを使う b. 石油キキの時代 c. キキ迫る顔 d. キキとして取り組む
ア 鬼 イ 機 ウ 嬉 エ 記 オ 危

- 3 a. 今年の気温はイジョウだ b. 彼に権限をイジョウする c. 別の車にイジョウする d. 期待イジョウの活躍
ア 遺 イ 以 ウ 異 エ 委 オ 移

- 4 a. 風邪の予防でカンキする b. カンキに入り雨量が激減した c. カンキの輪に加わる d. 注意をカンキする
ア 歓 イ 喚 ウ 乾 エ 換 オ 感

- 5 a. コウジョウで働く b. コウジョウをたまわる c. コウジョウを述べる d. コウジョウ的な痛みに悩む
ア 厚 イ 恒 ウ 口 エ 交 オ 工

次の文章を読んで、あとどの問い合わせに答えなさい。

小学六年生のさくらは料理が好きになり、受験勉強のかたわら成績を落とさないという約束でオムレツ作りに挑んでいた。料理をしない母ともいつか一緒にキッチンに立ちたいと願っていたが、模試の結果が悪く、母によつて料理は禁止となつてしまつた。

食卓には年越し蕎麦をするする音だけが響いていた。誰もなにも言わないけれど、そこにある空氣は明るい。おいしいものを食べるときは誰でも無言になるのだと、さくらも麺をすすり上げながらしみじみ思つた。

「やつぱりばあちゃんの蕎麦おいしい。僕もうよその蕎麦食べられないかも」

誰よりも早くつゆを飲み干して口を開いたのは航輔だつた。生意氣、と琴乃が航輔の脇腹をつつく。

「今日のお蕎麦は私とさくらで作つたんだよ。おばあちゃんは手伝つてくれたの。おつゆは私の自信作」

「え、 そうなの？ でもおいしかつたな。おかわりない？」

① 「残念でした、完売でーす。また来年ね」

二人のやりとりを眺めながら、ふうつと息をつく。ほかの親戚からも蕎麦は大好評だつた。おいしい、とあちこちから上がる声に安心して背中の力が抜けそうになる。

「うん、ほつとする味。おいしかつた」

少し遅れて届いた声にはつとする。母の声だつた。思わずそちらを見やると、満足そうな表情でつゆを飲み終えたところだつた。何と言つていいかわからず、いよいよ大きく息を吐き出してゆつくりとまばたきをした。自分に向けた言葉なのか、それとも独り言だつたのか。どちらにしても、蕎麦がおいしかつたと言つてもうれたことは嬉しかつた。

「さあさあ、今年は特別に出汁巻き玉子を焼いてみたよ。まだお腹に入るといいけど」

祖母が運んできた皿を見て、さくらはわあっと声を上げながら目を輝かせた。長方形に巻かれた玉子焼きはつやつやと薄黄色に光っている。新年を迎える前に春が来たかのようだつた。

「これ、出汁巻き玉子っていうの？」

「そうだよ、さくらは食べたことなかつたかね？ さつきのお出汁を少しどつておいて、卵と混ぜ合わせて焼いたんだよ。熱いうちにお食べ！」

箸を伸ばし、春のかけらをつまんで口へ入れる。その瞬間、心が安らぐ香りが鼻をくすぐつた。囁みしめた卵の隙間から熱い出汁があふれ出し、ほんのり現れた甘さが出汁に溶けた。飲み込むと温かさが胸をゆっくりと下りていく。そうして胃のあたりまで辿り着いた卵の熱は、さくらの身体全体を温めながら優しく広がつていつた。

ゆつたりとしたバイオリンの旋律に、木管や金管の音色が少しづつ合わさつて心地よく広がつていくさまが浮かんだ。材料はあまり多くないはずなのに、どうしてこんなに厚みのある響きになるのだろう。魅力的なユニゾンにわくわくする。

「これあつたかくておいしいよ、おばあちゃん。どうやつて作るの？」

「喜んでもらえたならよかつたよ。そんなに難しくないから、あとで教えてあげようね」

「うん。甘いのはどうして？ 卵の味？」

③「ばあちゃんの出汁巻き玉子はね、ほんのちょっとお砂糖を使つてるんだよ。普通は入れないかもしれないけど、じいちゃんが甘い方が好きつて言うからね」

黙つて食べながら頷いている祖父が視界に入つた。出汁巻き玉子の作り方にはとても興味がある。これまで自分が作つてきたオムレツとよく似た卵料理なのに味わいも食感もまるで違う。それに、しつかり固まつているのにふわふわしているのはなぜだろう。やつぱり、練習をしてたくさん作つてきたからこそ出せる味なのだろうか。

祖母は難しくないと言つたけれど、オムレツもまだ納得がいっていないのに出汁巻き玉子なんて作れる自信はなかつた。それでもいつか、祖母の作るような出来栄えを目指してみたい。さくらの胸に、もつと料理がうまくなりたいという想いがふつふつとわき上がつた。

改めて確かめた目標は、心の中で静かな光を放つていた。こんなところで諦めてなんかいられない。^④さくらの瞳にも、燃え立つ輝きが揺らめいていた。

「おばあちゃん、ちょっとお願ひがあるの」

キッチンで一人だけになるタイミングを見計らい、洗い物をする祖母に切り出した。

「どうしたの。言つてござらん」

「あのね……私、成績が下がつたから料理をやめたつて言つたでしょ。そういう約束だつたし仕方ないんだけど、でもやつぱりまだ料理をやりたいの」

料理を始めたきっかけや、これまでの経験を祖母に話す。母が料理をしないことは黙つていた。母に向かつて大きな声を上げたこと、それからずつと母との関係がよくなることを伝え、そのあとで自分の決意をはつきりと口にする。

「私はお父さんとお母さんに、どんなに大変でも受験と料理を両方ともしつかりできるところを見せたいの。自分で決めたことをやり遂げて、私だってできるんだつてことを知つてもらいたい。それで、一人に私の作る料理を食べてもらいたい。だから、今じやなきやだめなの。受験が終わつてからじや遅いの」

「そうかね。それで、おばあちゃんは何をしたらいの？」

「また料理してもいいって言つてもらえるように、お父さんとお母さんに話をしてほしいんだ……成績だつて、本当は下がつたんじゃないもん。確かに順位は抜かされたけど、それは私より成績低かつた子が伸びただけだから。私は料理始めてからもずっと今までと同じ点数取つてきたんだよ。ずっとトップの方にいたときより悪くなつたわけじゃないの」

そんな言い訳は通用しないかもしれない、と思つた。抜かされたのは事実なのだから、そんな考えは甘いと言われてしまうだろう。それでも、今の状況から料理を再開するためには祖母の力を借りるしかなかつた。

「なるほどねえ。難しいことだね。さくらは、本当にやり遂げる自信と覚悟があるの？」

「……あるよ。受験に失敗したら、もう自分の好きなことはやらない。料理もやらない」

⑤ 「それは困つたね。好きなことをしない人生なんて、きっとつまらないでしょう」

※ 食器を洗い終えた恭子は、思い詰めた表情のさくらとは対照的にゆつたりと笑つていた。そしてじつとさくらの目を見つめ、静かに語りかける。

「さくら。料理というのは生きしていくための力なんだよ。食べなければ人間は死んでしまうでしよう？ だからと言つて、口に入りさえすれば何を食べてもいいってもんじやない」

祖母の言葉を一言も聞き漏らさないように、全身の神経を集中させる。

「食べ物は身体を作るけど、同時に心も育てていくものなんだよ。心を元気に育てるためには、心のこもった食事が一番だとばあちゃんは思つてる。どんなに身体が丈夫でも心が育つてなかつたら、それは『生きている』とは言えないんじやないかね」

胸に小さな痛みが走つた。まるで自分がしつかり生きていないと言われたように感じてしまう。けれど祖母が言つているのはそんなことではないはずだ。

傷つくもんか。そう、心を奮い立たせて祖母の言葉を待つ。

「さくらは、料理をするのが楽しかった？」

祖母からの問いかけは、あまりにもシンプルなものだつた。

「……うん。すごく楽しかった。私、料理が好き」

正直に告げる。それを聞いた恭子の顔がまたほころんだ。

「それでいいんだよ。少し難しいことを言つちやつたけど、楽しいからやつてみる、それで十分。その素直な気持ちがほんとは一番大事。考えすぎてわからなくなつたら、一度力を抜いて素直に考えてみること。自分がどうしたいのか、気持ちの根っこをよく見るの。料理にしても、お母さんのことにしてね」

ハツとした。祖母の言葉は心の無防備なところに触れた。⁽⁷⁾

母に対してもつと素直になるなんて、プロ並みのオムレツを作るより難しい。とつさにそう思つてしまつたけれど、祖母の言いたいことをよく理解せずに撥ねのけてはいけない気もした。口をつぐんでじつと考える。

模試が返つてきた日の夜のことを思い出す。あのとき母に投げつけた言葉は自分の素直な気持ちだと思っていた。けれど一方的に殴りつけるような、怒りや悲しみに任せて放つた言葉ばかりだつた。母が悪い、そう決めつけて耳を塞いだのもただのわがままだ。自分はずつとなにかを勘違いしていたのだ。

そこまで考えたところで少しバツが悪くなつた。母に謝らなくてはいけない。⁽⁸⁾ そう思うと同時に、ずっと暗がりだつた心のトンネルに出口の光が差したように思えた。

しばらく伏せていた目を上げ、もう一度祖母の顔を見る。待つていたように恭子は言葉を紡ぐ。

「でも、今のさくらは楽しいだけじゃいけないと思つているんでしよう。料理を通じて挑戦して、大変でもしつかり自分の道を進もうとしてる。それは人としてすごく立派なことだよ。だから、そんなさくらをばあちゃんは応援するよ。素直な気持ちを忘れないで、目標を見失わないで、しつかり自分の力で頑張つてごらん」

そう言うと恭子は、自分より少し背丈のあるさくらの頭をくしゃくしゃとなでた。

「いつも誰かの陰に隠れて、自分の意見なんかほとんど言えない子だったのにねえ。さくらは変わつたよ、本当にえらくなつた。もうすぐ中学生だものね。ばあちゃんは嬉しいよ」

頭をなでられるなんていつぶりだろう、と照れ笑いを浮かべた。自分が変わつたと言われて、これほど嬉しいと思つたことはな

い。祖母の言葉は出汁巻き玉子のようにやさしく温めてくれた。包み込む愛情を全身で感じられた幸せを噛みしめる。

挫けてなんていられない。こんなところで諦めるなんて嫌だ。きつと間に合うはずだ、受験も料理も、それから母のことだつて

——再び点つた決意の灯は、多少の風くらいでは吹き消されない煌々とした光を放つていた。

遠くで除夜の鐘が鳴る音が聞こえる。^⑨終わりへと歩みを進めていた一年は、新たな始まりをおごそかに迎えようとしていた。

(中村汐里 『殻割る音』)

注

※航輔・琴乃…さくらのいとこ。姉弟。

※ユニゾン…音楽で、同じ高さの音。また、そのような音や旋律を、複数の声や楽器で演奏すること。

※恭子…さくらの父方の祖母。

問一——線部①「残念でした、完売でーす。また来年ね」とありますが、ここから読み取れる琴乃の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんばかり称賛されてすねている。

イ みんなのお世辞に気づかず喜んでいる。

ウ 素直な感想を述べる航輔にはにかんでいる。

エ 来年もさくらと一緒に料理したいと願っている。

オ もつとおつゆを作つておけばよかつたと後悔している。

問一一 線部② 「いよいよ大きく息を吐き出してゆっくりとまばたきをした」とありますが、このときのさくらの心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア さくらが料理することを嫌う母が、自分のおつゆを素直にほめてくれたことで、今後は料理することを許してくれるのではないかと期待している。

イ 以前は面と向かって自分にかけてくれたであろう言葉を、今となつてはかけてくれないほど、母との関係がこじれていることに気付き驚いている。

ウ 普段料理のことでのみあう母が、みんなの前で自分の料理を称賛してくれたことから、母も自分との関係性を修復しようとしていることを知り喜んでいる。

エ いつも厳しい母が自分の料理をおいしそうに食べるのを見て喜びを覚え、感謝を伝えようとするも、あまりの嬉しさに声が出ず困惑している。

オ 関係性にしこりが生じている中で、母が自分の作った料理に対しても思ひがけない反応をしたことを嬉しく思いつつ、自分を落ち着かせようとしている。

問三 線部③ 「ばあちゃんの出汁巻き玉子はね、ほんのちょっとお砂糖を使ってるんだよ」とありますが、このような調味料の使い方を何といいますか。ひらがな五字で答えなさい。

問四　——線部④「さくらの瞳にも、燃え立つ輝きが揺らめいていた」とあります。これはどのようなことを表していますか。

その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 祖母の力を借りることで料理を続けることができるのではないかと思いつき、どんな手を使ってでも祖母の協力を得ようと意気込んでいるということ。

イ 祖母の作った出汁巻き玉子に対抗し、人を感動させる料理を作るためには今まで以上に精進しなければならないとやる気満ちあふれているということ。

ウ 母に料理を禁じられ未来に絶望していたが、好きな料理を中学で続けるために祖母の援助を受け、受験勉強を頑張ろうと闘志を燃やしているということ。

エ 祖母の料理に感銘を受け、たとえ困難でも学業も頑張りつつ、料理を続けられるように努力しようという意欲がわいてきたということ。

オ 祖母の作った出汁巻き玉子を自分の手で再現するために、何としても受験に合格しようという熱意が高まってきたということ。

問五　——線部⑤「食器を洗い終えた恭子は、思い詰めた表情のさくらとは対照的にゆつたりと笑っていた」とありますが、このときの恭子の状況はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア　さくらの人生を幸せなものにするために、料理については自分が指導してあげようと思つてている。

イ　料理という自分の好きなことで思い悩むさくらに、寄り添つてあげようとしている。

ウ　自分の作った出汁巻き玉子が、さくらに大きな影響を与えたことに喜びを感じている。

エ　思い詰めた表情のさくらに対して不安にさせないよう、あえて明るくふるまおうとしている。

オ　さくらから勉強をけつしておろそかにしないという覚悟を聞き、うれしく思つてている。

問六　——線部⑥「それは『生きている』とは言えないんじゃないかな」とありますが、祖母は「生きる」ことをどのようなことだと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア　丁寧につくられた食事を摂ることで、身体だけでなく心も健やかに育む生活を送ること。

イ　精神的な安定を第一に考え、加工済みの食品を摂取することができるだけ避けた生活を送ること。

ウ　他人との協調を大切にし、自分を理解してくれる人達と食卓を囲む生活を送ること。

エ　どんな困難でも克服できるよう、強い肉体を手に入れるべく良質な栄養を摂る生活を送ること。

オ　食事を通して生命のありがたさを感じ、何事にも感謝の念をもつた生活を送ること。

問七

——線部⑦「祖母の言葉は心の無防備なところに触れた」とあります、これはどのようなことを表していますか。その説

明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母との関係が良くないことから日をそらして、料理と同じようには母に向き合つていなかつたことに気付いたということ。
イ 祖母の言つたことはさくらにはまるで考えが及ばなかつたことであり、それがさくらの心に強く響いたということ。
ウ 料理や母との関係のことはデリケートなため触れられることはないとthoughtっていたが、話題にされ驚いたということ。
エ 料理のことで意固地になり凝り固まつてしまつたさくらの考え方を、祖母は簡単に解きほぐしてくれたということ。
オ 祖母の答えは考えてもみなかつたほど単純なものだつたが、さくらには実行できなさそうな内容であつたということ。

問八　——線部⑧「そう思うと同時に、ずっと暗がりだつた心のトンネルに出口の光が差したように思えた」とありますか、このときのさくらの心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 母に謝ることは難しいが、自分が楽しみながら作った料理を母も食べれば、料理をしたいという自分の素直な気持ちを理解してくれるのではないかと期待している。

イ 自分の考えが母には理解されない中にあっても、誰よりも自分のことを認めてくれる祖母にこそ、絶大な信頼を寄せるべきなのだという思いを強めている。

ウ 勉強と料理の両立^二立^一ができないのは母のせいだと思っていたが、自分にも原因があるのだという祖母の言葉によって、自分の非に気付き現状が変わるかもしれないという望みを感じている。

エ 料理がうまくならないのも成績が向上しないのも母が原因であると考えていたが、好きであれば続けることが大事だという祖母の言葉を信じて、今後も頑張ろうと思つてている。

オ 祖母から自分のしたいことを好きなようにやれば良いと言われ、自分の考えは間違いではなかつたと改めて感じ、母には理解されなくても好きな道を進もうと決意している。

問九　——線部⑨「終わりへと歩みを進めていた一年は、新たな始まりをおごそかに迎えようとしていた」とあります。この表現にはどのような意味が込められていると考えられますか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 成績も下がり、大好きな料理もできなくなつたことからまるで人生の終わりのように暗く塞いだ年末であつたが、この大晦日ですべてが解決し、すがすがしい気分で新年を迎えるということ。

イ 一年の終わりというだけでなく、六年生であるさくらは小学校という一つの学齢期とともに終えるが、年明けいよいよ訪れる中学受験のため気を引き締めなければならぬということ。

ウ 年の暮れとともに大好きな料理を禁じられ、もう二度とすることはできないと考えていたが、祖母の助力で新年早々再び料理に挑戦できるかもしれないという希望がわいてきたということ。

エ 料理のことで母と口論になり、関係が行き詰まりを迎えてしまつた年末であつたが、祖母との対話の結果母も考え方を改め、新年とともに関係が改善される兆しがあるということ。

オ 年の暮れとともに、成績の低下や料理の禁止などさくらを追い込むようなことがあつたが、大晦日の祖母との交流によって解決の糸口がつかめ、気分が一新され、希望を抱くようになつたということ。

問十 次の会話文は、この文章を読んだ中学一年生が感想を自由に言い合っている場面です。これを読んで、あとの問い合わせに答えるさい。

Aさん：「この話を読むと受験のときのことをよく思い出すなあ」

Bさん：「卵料理の話がよく出てくるけど、単においしそうなだけじゃない意味を持つているように感じるね」

Cさん：『祖母の言葉は出汁巻き玉子のようにやさしく温めてくれた』という描写があるように、卵料理に関する表現と登場人物の心情が重なりあつているんじゃないかな』

Dさん：「だとすると、タイトルの『殻割る音』も単に料理を作る時に卵を割ることだけを表しているんじゃないのかもしないね」

Eさん：「それこそまさに、主人公のさくらがさまざまな壁に直面しながらも変わっていくという、自分の『殻を a』ことを表しているのかもね」

X先生：「この文章に小タイトルをつけるとしたらどんな言葉を選びますか？」

Aさん：『b』ってのは、どうかな。タイトルと同じように複数の意味がかかつた言葉だと思うんだ

みんな：「いいです」

1. 『殻を a』が慣用表現になるように a に当てはまる語を考えて書きなさい。

a

a

a

a

a

a

a

a

a

a

a

a

a

b

2. b に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい

ア 割り入れる イ かき混ぜる ウ 火にかける エ 天地を返す オ 包み込む

ア 割り入れる イ かき混ぜる ウ 火にかける エ 天地を返す オ 包み込む

ア 割り入れる イ かき混ぜる ウ 火にかける エ 天地を返す オ 包み込む

次の文章を読んで、あととの間に答へなさい。

I

中国の龍についても、その誕生の背景と歴史はメソポタミアによく似ている。

中国の農耕と牧畜も、洪水に見舞われる黄河の本流の辺ではなく、その支流の段丘上の高原にはじまつた。農耕ではアワやキビそしてムギやイネの栽培がおこなわれ、牧畜では犬と豚の飼育が、ついで羊、牛、馬が加わる。農耕の生産圏が本流域にまで広がるのは、国家的権力が成立、黄河の治水が進み、灌漑^{かんがい}が普及してからのことである。

黄河も河筋が大きく変わるほどの氾濫をくりかえす河であつた。政治の「治」はもともとこのような河川を管理すること、天下を治めることは水を治めることだつた。伝説では最初の王朝とされる夏の始祖・禹について『史記』夏本紀もつぎのように記している。帝堯^{ぎょう}のとき大洪水が襲い、人民が困窮した。そこで堯は鯀に治水を委ねたが九年たつても水は治まらなかつたので堯を繼いだ帝舜^{しゆん}は鯀を罰してその子の禹に治水を命じた。禹はそれに全力を尽くし、苦心の末に治水に成功した。その功によつて、舜の死後、帝位はその息子に伝えられず、禹が即位したというのである。

このように中国でも為政者の関心が黄河の治水と灌漑にむけられるとともに、蛇は龍に変容したと考えられよう。それは大河・黄河のシンボルとしても、天子の権力の強大さを示すシンボルとしても、巨大でかぎりなく強力な獸が創造されねばならなかつたのである。

A、中国の龍は権力者の敵対者とみなされない。

B、もつとも聖なる動物であつた。

C、中国の龍は

河や水の神であると同時に、河や水を治める王権のシンボルでもあつた。^③「禹」の甲骨文は一匹の蛇から構成されているのであり、

D、治水に功のあつた禹も蛇あるいは龍の王と考えられていたのは明らかである。

この西方の龍にはみられない性格は、自然を人間に敵対するものとはみない中国人の自然観にもつながる。儒教の天命思想は、

天子であつても天命には隨順せねばならず、治水・灌漑という人為を否定するものではないが自然の征服よりも自然に従うこと的理想とする。道家にあつては、人為を否定、自然との一体化=無為自然をもとめた。このような哲学を生んだ中国人にとつて、自然の象徴である龍は人間に敵対する存在ではなかつたのである。『國語』周語下も、鯀が治水に失敗したのは、自然の理に背いて河川をせき止め、山を崩し、沢を埋めようとしたからであり、禹が成功したのは、天地にしたがい、人民のことを考え、多くの生き物を傷害しないようにつとめ、さらに、河川の勢いをたすけて、水を疎通させたからであるとのべていた。

II

天水と湧水に依存した新石器時代の農耕文化のなかで蛇の信仰が生まれたのにたいして、メソポタミアでも中国でも、龍の觀念は、青銅器時代における灌漑農業のもとで誕生した。あるいは、大規模な灌漑農業による農業生産に支えられた強大な政治権力の所産であつたともいえる。

農耕民が蛇に求めたのは自然を動かしうる呪力であつた。蛇は雨を恵む動物であると考えていたのである。そのような蛇を原形としながらも、龍は被支配者としての人間に向けられた権力意志の表現、権力のシンボルであれ、反権力のシンボルであれ、国家権力と不可分なものだつたのである。

龍とは何か——これまで、巨大性、角と足の具有、異種動物の混成、多頭といった形態、あるいは呪的・靈的能力からとらえてきたのであるが、その起源からいえば、^⑤龍とは政治化された蛇であると定義できよう。

III

それでは、なぜ、メソポタミアや中国とおなじように大河にはぐくまれた國家権力を成立させたインドとエジプトの都市文明には「龍らしい龍」が出現しなかつたのか。この疑問にはまだ答えていない。龍の起源についての議論をつめるには、この点も明らかに

⑥

かにされねばならない。

インドに侵入したアーリア人は原住民によつて信仰されていた蛇を悪神視し、「障碍物」とよんでいたが、しかし、それをシユメル人のように「龍らしい龍」に変えることはなかつた。

その最大の理由を私は、インドとメソポタミアの生物学的な環境の差異に求めたい。インドには大型のキングコブラやインドコブラといった蛇が棲息していたからであると考えるのである。キングコブラの体長は四、五メートル、もたげた鎌首の高さは一・五メートルを超え、敵を威嚇する。しかも猛毒の蛇であつた。水の神としても、守護神としても、政治的権力のシンボルとしても、この無敵のコブラが当たられるのであれば、あえて特別な怪獣を創造する必要はなかつたのではないかろうか。

蛇の遍在は蛇の信仰の伝播と定着を促す要因であつた。しかし、コブラという特殊な蛇の存在が龍への「進化」を妨げることになつたのである。もしも、インドにコブラが棲息していなかつたならば、インドにも「龍らしい龍」が生まれたにちがいない。エジプトでも「龍らしい龍」は出現しなかつた。中国の龍とこの点ではおなじく、ウラエウスは聖なる動物として王権のシンボルでありつづけた。しかし、ついに「龍らしい龍」に「進化」することはなかつたのである。

第一の点については、エジプトもまたヒクソス人による一時的な侵略はあつても、エジプト人による支配がつづいたことがその理由にあげられよう。第二の点については、インドと同様、猛蛇コブラがエジプトにも棲息していたからである。エジプトを代表するエジプトコブラの体長は三メートルほど、最大のものは四メートルを超える。キングコブラよりは小さいが、クレオパトラもこのコブラに胸を噛ませて命を断つたと伝えられているように毒性のきわめて強い蛇であつた。

インドとエジプトとはちがつて、中国の黄河流域やメソポタミアにはコブラのような大型の蛇は棲息しなかつた。キングコブラの分布はインドから東南アジアまででありインドコブラも西はパキスタンからバングラデイシュまでである。タイワンコブラにし

ても本土では南部に棲息するのみである。エジプトコブラはアフリカから西はアラビア半島の西南部に限られる。メソポタミアにはコブラは棲まず、毒蛇といつてもマムシほどの蛇がいるだけである。

大河とそこに発生した都市国家が龍を生んだ。しかし、おなじ都市国家でも、コブラの棲息していたインドとエジプトでは「らしい龍」は生まれず、コブラの龍のままであった。もしも、ティグリスとユーフラテス河流域や黄河流域に大型で猛毒のコブラが棲息していたならば複合動物の龍が空想されることではなく、インドやエジプトとおなじようにコブラの龍が崇拜されたのではないか。猛獸の虎やライオンがそのままの姿で聖獸視されたようである。欠乏が人間の想像力を刺激したのだといえよう。

（荒川紘 『龍の起源』）

問一 A B C D に入るこ**と**ばとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかも イ さて ウ したがつて エ 逆に オ ただし

問二 I II III IV には各段落の小題が入ります。 V に入る小題として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア コブラは無敵な毒蛇である イ コブラは政治化された蛇である ウ コブラが龍化を妨げた
エ コブラの不在が龍を生んだ オ コブラが進化して龍となる

問三 次の文は、ある形式段落の最後の部分に入ります。この文が入る直前の五字を抜き出しなさい。（句読点・記号も一字とします。）

すでにインダス文明でも大規模な灌漑農業がおこなわれており、インダス文明とメソポタミアとのあいだの交流も否定できないにもかかわらずである。

問四 — 線部①「天下を治めるとは水を治めることだつた」とあります、具体的にはどういうことを表していますか。本文を

踏まえて最も適当なものを次の□から選び、記号で答えなさい。

- ア 川をせき止めたりせず、水を疎通させることで黄河の氾濫を抑え込んだということ。
- イ 頻繁に洪水が生じる黄河の本流域を避け、安定的な支流域の高原地帯に都市を築いたということ。
- ウ 灌漑を普及させ、農耕の生産圏を拡大させ、国家の食糧生産を安定させたということ。
- エ 天子の強い権力を用いて、時には山を崩し沢を埋め立てて黄河の氾濫を防いだということ。
- オ 農耕のみならず牧畜に用いるために河川から水を引き、家畜の数と種類を増やしたということ。

問五 — 線部②「蛇は龍に変容した」とあります、なぜだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 民衆の関心が蛇のもつ独特な形態や生態に集まる中で、これを利用して民を統治しようという王権の意思が働いたから。
イ 治水が為政者の果たす大きな務めであつた時代に、王権の力を示すため水の象徴である蛇を誇張して表現するようになつたから。

ウ 生活に大きな影響をもたらす河川の象徴である蛇を信仰する中で、その影響力に伴いしだいに巨大に描かれるようになつていつたから。

エ 蛇のもつ強大な呪力を民衆に知らしめるために、視覚的に恐怖を覚えるようなデザインを王権が作り出して広めたから。
オ 蛇の怒りによつて生活に甚大な被害が生じないように、その特徴をより巨大に描くことで民の信仰心を高め蛇の怒りを鎮めようとしたから。

問六 — 線部③「禹の甲骨文」とありますが、本文で紹介されている「禹の甲骨文」はどれだと考えられますか。次の画像のうち、最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア



イ



ウ



エ



問七　——線部④「中國人の自然觀」とあります、本文で述べられているものとして適當なものを次の二つ選び、記号で
答えなさい。

ア　自然に手を加えることによつて、本来調和の取れていた世界が歪んでしまつたため、人間は自然本来の姿を取り戻すこと

を目指さねばならない。

イ　自然を人間が作りかえることを良しとせず、人間もまた自然の一部であることを意識しつつ、究極的に自然と合一すること

を目指さねばならない。

ウ　自然が人間の営為に脅威を与えることがないよう、自分たちの手で都合の良いように作りかえていかねばならない。

エ　自然是人間の生活を脅かす存在であるが、人間は自然を制御することでその生活範囲を広げていかねばならない。

オ　人間が生活するうえで自然に手を加えても良いが、自然によつて災害が起きてもそれは定めであるとして受け入れねばならない。

カ　人間は自然の一部を構成する卑小な存在に過ぎず、自然による支配から脱却すべく人間は自然に手を加えねばならない。

問八　——線部⑤「龍とは政治化された蛇である」とありますが、これはどういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 蛇に多くの社会問題の原因を重ねて畏怖すること。
- イ 蛇を通して民衆の不満を具現化すること。
- ウ 蛇を軸にして生活上の様々な問題を論じること。
- エ 蛇に国を統べるために必要な意味合いを与えること。
- オ 蛇を超越的な力を持つた存在と見なして崇拜すること。

問九　——線部⑥「インドとエジプトの都市文明には『龍らしい龍』が出現しなかつたのか」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア インドとエジプトでは、王権のシンボルである蛇よりも巨大な龍をデザインすることは王権への反逆を意味したから。
- イ インドとエジプトには、巨大なコブラがいて、原住民はそれ以上に巨大な動物が存在することを想像できなかつたから。
- ウ インドとエジプトには、原住民が信仰する神がいて、それを排除してまで新しい信仰の対象を求めることがなかつたから。
- エ インドとエジプトには、強力な動物であるコブラがいて、それ以上に強力なシンボルの創造を必要としなかつたから。
- オ インドとエジプトでは、王権を示すためのシンボルが不要なほど、王家による原住民の支配が長く続いていたから。

問十 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 巨大な国家権力が誕生した結果として龍の概念が発生し、農耕民が抱いていた蛇への信仰はなくなつた。

イ 龍の存在は世界中で普遍的なものであり、降雨や河川に対する人間の根源的な恐怖から生まれるものである。

ウ 強力な毒を有するコブラがいる地域では、人々がコブラに強さと神秘性を見出だし崇拜の対象とした。

エ 場所が変われば龍の姿も多様に変わるものであり、蛇を原型に身近にいる様々な動物を組み合わせてつくりあげられる。

オ 中国では黄河の治水こそが王権の基盤であつたため、支配者は蛇を様々に改変し龍とすることで治水のシンボルとした。

問十一 二線部「欠乏が人間の想像力を刺激した」とあります、これはどういうことですか。以下の二つの条件に従つて七十

字以内で説明しなさい。（句読点・記号も一字とします。）

条件 ① 「無敵な存在」という語を用いること。 ② 「蛇」「龍」「コブラ」という語は用いないこと。

受験番号		
氏名	ふりがな	

1

1
2
3
4
5

1

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5

四

問一	<input type="text"/>
問二	<input type="text"/>
問三	<input type="text"/>

[[[

A blank rectangular box with a thin black border, intended for a student to draw a simple object.

問十	1
	2

一
三
二
〇

]]

1

問十二

四

—
—
—

—

五

A